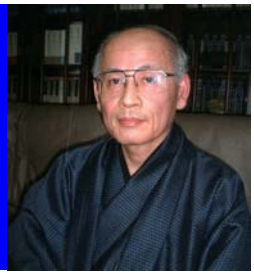
THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報　No.30　2009.11

目次

巻頭言　情報発信は附属図書館から　1
特集　第5回『言語力』大賞コンテスト　3
特集　新たに指定された貴重資料の解説　6
lead-off　本との出会いを楽しむ〈第4回〉　7
lead-off　図書館に関する話題〈第4回〉　8
lead-off　Library News　10
弘前大学出版会より新刊紹介　12
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧　13

情報発信は附属図書館から



理事・副学長（社会連携・情報担当）　三浦　康久

平成21年の弘前大学は、教職員、学生、卒業生、それに地域住民らにとって、記憶や記録に残る年になったのではないだろうか。

今年は本学が創立して60周年というさらなる躍進の年を迎えることから、北国の美しい四季を通じて多彩な記念行事が学内外の方々の協力と理解のもとに催された。

一連の行事の主役は、本学の大先輩として誇れる太宰治である。本学創立60周年と太宰治生誕100年という記念すべき年をリンクさせることで、弘前大学の名が地域の人財、文化、歴史などとともに全国発信ができたものと確信している。

桜の花つぼみが咲きほころぶ頃、附属図書館のスタッフが埃にまみれながら整理していた官立弘前高等学校の膨大な資料群から、埋もれていた一葉の写真を見つけだした。

その瞬間、恥じらうような微笑をたたえた17歳時の太宰治が、永い眠りから蘇ったのである。

生誕100年の意義ある年に、肖像写真の新発見という絶妙な偶然に学内が驚きと喜びに包まれた。新発見は幸運な偶然だが、歴史のシナリオとしては必然的だったのかもしれない。

この大発見の記者発表の席で、本学の若き教員が解説役で全国デビューした。彼はこれを契機に太宰治の研究家として関連行事の中心的存在となったほか、本学出版会が記念発行した「官立弘前高等学校資料目録」に研究論文を寄稿するなど学内外に活躍の場を広げている。

太宰治というネームバリューを活用したイベントは続く。

月見草にも似た花明かりが津軽野を仄かに染める時、大学構内に太宰治の文学碑が建立された。除幕式には、梅雨空のなかを太宰治のご長女が駆けつけてくださった。碑文は『津軽』から、ご長女がかねてから思いを寄せていたという一節が引用された。

私は、慣れない業務の先行きに不安を覚える時、文学碑の前に佇むことにしている。一見弱々しい刻字から太宰治の目線を感じる。いつのまにか太宰治の世界にひたっている自分に気づく。恍惚とはこういうことなのか、これが太宰治の持つ力なのか、と。

北の街の短い夏が終わろうという二週間、「シニア・サマーカレッジ」が開講された。全国のシニア層を対象にした地元滞在型の公開講座で、4回目を迎える。

今年のカリキュラムは、太宰治を中心に展開した。講師には先述した若手教員のほか、弘前市で活躍している太宰治の研究諸家にお願いした。その趣旨は、全国から参集する受講者を通じ、名実ともに知名度のメジャー化に寄与しようと考えたからである。

その狙いが果たせたかどうかは別として、太宰治特集の企画が功を奏し、開講以来もっとも多い受講者を迎えることができた。これも太宰治効果と言えよう。

秋日和の穏やかな午(ひる)下がり、「学術講演会」が開催された。今年のテーマは太宰治をおいてほかにない。構成は単なる学術講演に止まらず、本学附属中学校演劇部員による「走れメロス」の群読で彩りを添えた。舞台を飾った若人が、附属中学校の存在を改めて県民市民に知らしめてくれた。

講師には、東京大学から著名な太宰治研究家をお招きし、独自の観点から表現世界が論じられたほか、太宰治のご長女をふたたびお迎えして、秘蔵の家族写真の紹介とともに限りない家族愛について語りかけられた。ホールの聴衆が味わい深い一言ひとことに酔いしれていた。

山もみじが季節の色に燃える頃、芸術の秋にふさわしく願ってもない朗報が舞い込んだ。モントリオール世界映画祭の最優秀監督賞受賞作『ヴィヨンの妻～桜桃とタンポポ～』の先行上映である。

全国公開を前に本学で上映が実現できたのは、太宰治を生んだ学び舎で後輩の学生に鑑賞して欲しいと願う映画関係者のご厚意からであった。上映前に、映画監督とのトークショーが行われ、本学の若き研究家がお相手をつとめた。当日の模様はメディアを通して各地へ発信された。

ほかにも最近、太宰治関連の新たな資料の寄贈があり、キャンパスが雪色に包まれる頃までには公表すべく温めている。

大学業務がどちらかというと六法全書ふうな側面が濃く、もうすこし情緒的な色合いに満ちていれば愉しいのに、と叶わぬ願いを抱いている日常の中で、私にとって一服の清涼剤とも言える太宰治を媒体とした全国発信ができたことは、たいへん喜ばしく思っている。

ところで、本学が進めてきた太宰治関連のイベントには、附属図書館長以下のスタッフが貢献しており、弘前大学の名声を全国へ発信し印象づけたことは、評価されることである。

＜世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学＞という目標に向けて、特色ある大学運営が求められている今、これからもその推進力の源泉を附属図書館におおいに期待している。

（みうら　やすひさ）

太宰治の文学碑

私には、また別の専門科目があるのだ。
世人は假りにその科目を愛と呼んでゐる。
人の心と人の心の觸れ合ひを研究する科目である。
私はこのたびの旅行に於いて、
主としてこの一科目を追及した。
太宰治『津軽』より